

宮本輝『錦繡』論のために — 亜紀と靖明・二つの平行線 —

黄麗娜

『錦繡』という十四通の往復書簡から成る書簡体小説は、宮本輝の初期作品（初出『新潮』一九八一年二月。単行本『錦繡』新潮社、一九八二年三月）の一つである。

この作品に関する先行研究はあまり多くない。それらは、いずれも、二人の主人公——勝沼亜紀と有馬靖明——が書簡の往復を重ねることで、互いの理解を深めて、人間的に成長してゆく物語だとしてきた。

たとえば新潮文庫『錦繡』の解説者・黒井千次は「いわゆるハッピーエンドの小説ではない」と留保を付けているが、「現在から未来に向けて更に歩を進める姿勢さえ」二人は示していて、この作品は「未来に向けて吹く風」をさらした男と女の生命の物語である」と解説文を締めくくる^{〔註1〕}。野松循子は、「心の綾」を交わす書簡の往復は二人の「生の回復と再生、そして自己変革」を可能にし、書簡の往復を通して亜紀と靖明の二人は、「生命そのもののや宇宙の法則」（それは宮本輝自身の体験を反映したものと野松は見る）に繋がるべき「自らの内なる本質的な時間」を手にしたのだと言う^{〔註2〕}。山本康治もまた「罪を得た靖明にしても、障害を持つ子の母である亜紀にしても、結末では新たな生の肯定がなされ、後の宮本作品の基調をなす人間肯定への意志が見られる」と宮本輝作品史の上に位置づける^{〔註3〕}。

こうした主人公の人間的成长を肯定した先行研究は一つのことを前提としているようだ。それは、靖明宛の書簡に綴られた亜紀の過去や思念が靖明のものになり、また、靖明の綴ったそれが亜紀のものになる——すなわち、書簡の往復がそのまま亜紀・靖明の二人の相互理解の過程であるとすることである。黒井は「二人は、結婚前の過去、結婚中の過去、離別後の過去を、手

に持った札を出し合うようにしてお互いに示し、欠落を埋め、謎を解く努力を続ける」と言い^{〔註4〕}、二人が共同して「謎を解く努力」を示したと読み取る。酒井英行も「人間存在が本来的に背負っている（淋しさ）を深く知った者同士の交感の物語」だと評価した^{〔註5〕}。

確かに二人の過去を知らない者が、往復書簡（この小説）を読んでゆけば、書簡の往復が重ねられる過程で、亜紀の知らなかった靖明の過去や欠落が埋められてゆくように見える。だが、そのことは、必ずしも、往復書簡の書き手（小説中の亜紀・靖明）の二人が互いを理解し合ったことと等価ではない。往復書簡というコミュニケーションにおいては、酒井の言うような〈交感〉も起こりうるが、〈齟齬〉も十分起こりうる。〈齟齬〉が生じて、書簡の往復は可能である。

観点を換えて言えば、書簡体小説を読む読者（書簡によって得られた情報を再構成して過去の空白を埋め、過去から現在に至るストーリーを構築してゆく作品世界外の存在）が得たものと、作品世界内において書簡を読み・綴る作中人物（作品世界内の存在）の認識や自覚そのものとは、区別されなければなるまい。読者がストーリーの欠落を埋めたからといって、あるいは、作品世界内の人物像やその内面理解の手掛かりを得たからといって、それが、そのまま作品世界内の人物そのものの認識であったり、また、自覚であったりするわけではない。

先行研究においては、作品世界内に限定された存在である亜紀・靖明の自己認識を十分に取り出せず、それに代わって読者が再構成・理解したものが、そのまま亜紀・靖明の理解とされてきたのではなかっただろうか。作者宮本

輝に着眼した作家論的な立場から提示された読解も、作品世界外の眺望点に立って作中人物たちの思念を理解するという点において、作品世界内存在としての亜紀・靖明の内面を見えにくくしてきたようにも思われる。

本稿では、作品世界内存在としての亜紀と靖明の〈交感〉の実質に目を向けてみたい。全十四通の手紙を三つの段階に分け（第一・第二通・第三・第四通、第五・第六・第七通、第八通以降）、ここでは第七通までを問題にする。第一通から第四通までの第一の段階については、あまり先行研究に取り上げられず、潜んでいる問題が軽視されてしまったのに対して、第五・第六・第七通に出現する「モーツァルト」のことが、あまりにも重視されすぎてきたように思われるからである。

第一節 亜紀像

「亜紀がすべてをおのれの「業」として引き受ける真の回心のときを迎えた」という酒井の指摘に代表させ得るが^{（註）}、先行研究は亜紀の〈成長〉を疑わない。亜紀の再生に注目するのはよいが、それ以前の亜紀がどのような存在であり、そして、それがどのように変わったのかということについては、検証を加えていない。（以下、引用は新潮文庫『錦繡』二〇〇四年三月第六〇刷改版に拠り、ルビは省いた。）

*本文一

私はあなたのお姿が消えたあと、しばらくじっとそこに立ちつくしておりました。それでも永遠に、あなたとお別れしてしまったように思えて、泣きだしたくなるのをこらえつづけていました。どうしてそんな気持ちに襲われたのか、私には自分の心がよくわかりません。（第一通13頁）

*本文二

少なくとも、あの事件の最も大きな被害者であった私が（それはお前ではなく、この俺のほうだとあなたは仰言るかも知れませんが）、当時、どんなことを考え、どんなふうにならぬ結論を導き出したのかということとを、ありのままにお話しておきたいのでございます。（第一通18頁）

（本文一）は靖明と偶然再会した当時の亜紀の心情である。「じっとそこに立ちつくして」「泣きだしたくなる」くらしいの未練がこの書簡の行間に満ちている。しかし、亜紀は「どうしてそんな気持ちに襲われたのか、私には自分の心がよくわかりません」と、そのような感情を生みだした根のどこにある、靖明への未練そのものについては言及しない。言及しないというよりも、それを露わにすることを避け、隠そうとしているかのようである。二人の他人でもない身内でもない関係と、亜紀の人妻の立場がそれを言わせないとはいえ、亜紀の抱えている心理的屈折が、このような態度を取らせたのだと考えられる。

（本文二）の括弧に入れられた挿入句もその表れである。たしかに相手の気持ちに配慮した待遇表現は手紙には多く見られる。だが、亜紀のこの手紙の場合は少々違うようだ。再婚して、障害を持つ子供を生んでしまうことははじめ、気に入った喫茶店が失火して、貴重な「モーツァルト」のレコードが灰になったことなども、浮気をした靖明のせいではないかと後の手紙で問い質すことから分かるように、「あの事件の最も大きな被害者」は自分であると亜紀は信じている。しかし、そうであっても、自己主張をした直後に、亜紀は相手を配慮する言葉を綴ってしまうのである。

このように自己主張を相殺するような表現を使ってしまうことは、亜紀の根底にある性格と深く関わっていると考えられる。お嬢様育ちでおとなしく、絶対的な権威を持つ父に従って、それまで自己を抑制してきたことの延長上にあると考えるとよいだろう。亜紀は、父の選択に従って靖明と結婚し、父の意志で離婚する。そして、また、父の希望で再婚する。不満が積み重なって、「暗に私たちが別れさせようとした父に憎しみを抱きました」（第五通72

頁)と手紙で訴えることしかできない。父への憎しみを抱いても、結局、亜紀は父に反抗することができなかった。靖明に対しても、言うべきことを表現できず、未練と恨みを正直に伝え、靖明の対応を求めることをしない。

しかし一方、亜紀は心の中では屈折と対抗するようなものも育ててきたようだ。次に引く(本文三)はその表れである。

*本文三

簡単に申し上げれば、私は、恋人時代から新婚時代におけるあなたとの月日の上に、離婚を目前にしながらなおあぐらをかいていたかったのです。そんな心の底には、あなたに対するかすかな同情の思いがあり、それを数倍上まわる憎しみもぐるを巻いていました。それらすべてが、一種の強固な自尊心を作りあげて、私を無口に、無表情にさせていたのをごいませう。(中略)私は、もうなくなってしまう見知らぬひとりの女性に、負けたくなかったのでございます。(第一通37頁)

(本文三)はなぜ十年前は離婚の際、靖明ともっと話し合わなかったのかということについての、亜紀の(弁解)である。「恋人時代から新婚時代におけるあなたとの月日」を誇りのように思っていたから、ヒステリーに陥った自分を見せたくない。「見知らぬひとりの女性に、負けたくなかった」から、靖明のことをどうでもいいように振舞ってみせた。だから「無口」、「無表情」にしていた……。一種の強固な自尊心」だと亜紀は書いているが、一種の意地でもある。そして、浮気の経緯が分かり、それ以上傷つけられること、つまり(二次傷害)を避けることが、話し合わなかった最大の理由だと考えられる。靖明と真摯に向きあわなかった亜紀の行動は、一種の我儘でもあるのではないか。とはいえ、亜紀はこの意地と我儘によって、人格のバランスを保つことができた。亜紀の性格の根底には、父に強いられた生き方に起因する屈折があるが、時として意地と我儘が突き出る。これが十年間の(沈黙期)を経てきた、靖明と再会するまでの亜紀像の輪郭だと思われる。

第二節 二人の課題

亜紀は靖明への未練を十年間も引き摺ってきた。「どうとう思いつくすべての方法を講じて、あなたの御住所を調べ、このような手紙を投函することになつてしまいました」(第一通5頁)と自らの行為を記した文面からは未練が十分伝わってくる。亜紀にとつて、この未練の解決、つまり(男と女の絡み)を解きほぐすことが最大の課題である。最初の手紙で、亜紀は靖明にそれを解決する責任があると責める。彼がどんな態度で亜紀の課題を引き受けるかが書簡往復の肝心なところだといえる。このことは二人が(交感)するか、あるいは(齟齬)を生じさせてしまうかということもつながっている。

亜紀の屈曲した書きぶりとは違って、靖明は始めからはっきりとした口調で話を進めることが印象的である。

*本文四

お手紙拝見いたしました。読み終えた当座、返事を出す気持はまったくありませんでした。しかし、日がたつにつれて、私もまたお話しなかつた多くの心理的事件を胸の内に持っていることに気づき、ためらいつつ筆を取つた次第です。

あなたは、何となくあいまいな、そこに明晰な意志というものなかつた私たちの離別とお書きになりましたが、それは間違っています。私の方には、別れなければならぬはっきりした理由がありました。私の起こした不祥事がそれです。(中略)どうにも弁解のしようがありませんでした。(中略)

それはさておき、私はこの手紙を、瀬尾由加子と私との関係から書き始めようと思えます。それがあなたに対する礼儀ではないかと思われる

からです。そのうえで、あなたを長い間あざむいてきたことをお詫びいたしましょう。なぜ私が、離婚の際、そのことを話さなかったのかは御理解いただけるでしょう。きざな言い方ですが、あなたをあれ以上傷つけたくなかったのです。
(第二通43頁)

(本文四)は靖明の返信の冒頭部分である。彼は「お話しなかった多くの心理的事件を胸の内に持っていることに気づいたからと、手紙の目的を正直に述べた。離婚の原因についても、亜紀の言う「明晰な意志というものがなかった」離別ではなく、「はっきりした理由」があると強調し、亜紀の未練を断つかのような文言を並べる。「この手紙を、瀬尾由加子と私との関係から書き始めようと思います。それがあなたに対する礼儀ではないかと思われるからです」と、返信の内容とその理由を明示する。そして離婚した時、亜紀に対して謝罪や弁解をしなかった理由も理路整然と述べる。ここに現れる靖明は実に冷静で計画的であり、文面もそれを反映して簡潔明瞭である。

この口調によって、靖明はこんなことを亜紀に暗示している。――すでに過去のこととして語られるべき二人の離婚については、激しい感情は持っていない。未練もなく顧みる興味もない。亜紀からの手紙が来なければ書き記すべきことでもない、ということである。この手紙の冒頭で亜紀の求めは拒絶されてしまった。そして、この拒絶は冒頭だけでなく、手紙全体にも広がっていく。由加子との関係を回想する(本文五)と(本文六)の括弧でくくられた挿入句、また末尾部分の(本文七)もその表れである。

*本文五

十一月初旬の、舞鶴特有のささくれだった冷たい風の吹く日でした。(い気になって何を書いているのだと笑われそうですが、私は瀬尾由加子が嵐山の旅館の一室で、自らの命を絶つたことを思うたびに、二十数年前のその日の出来事のある痛切な感懐をもって思い出してしまうのです。
(第二通47頁)

*本文六

果物売り場でメロンを包んでもらっているとき、ふとこのデパートの寝具売り場に由加子がいることを思い出してしまいました。すると心がときめいてきました。(結婚して一年足らずの妻がいるというのになんともいい気なものです、それが男というものだと思ってしまうのではありません)。
(第二通61頁)

(本文五)は靖明が舞鶴の親戚で暮っていたある日、学校から帰って、港に出かけた時の回想である。括弧にいれた部分は、前節に引いた(本文二)の亜紀の「それはお前ではなく、この俺のほうだとあなたは仰言るかもしれませんが」という挿入句とは似ているが、両者の実質はずいぶん違っている。亜紀のそれは語られるべき(物語内容)とは関係のない、相手を配慮する機能を担う挿入句であった。それに対して、靖明の書いた挿入句は以後の叙述内容を予め提示する(本文)の役も担っている。靖明の心に深く突き刺さっていたのは、亜紀との離婚ではなく、由加子との一件であったことが明瞭に語られているのである。

次の(本文六)は大人になった靖明と由加子をはじめて会った日の回想である。「それが男というものだ」という(無責任)な発言は靖明の手紙全体の性質を決定している。そこに読まれるのは、亜紀の求めに対する拒絶である。亜紀の怒りを買う(危険)を犯しても拒絶の意志を伝えるところに、靖明がこれ以後関わりを避けようとする姿勢が明瞭である。この姿勢は(本文七)においてはさらに強く出てくる。

*本文七

書きながら、何やらうんざりしてきました。もうどうでもいいではないかという気持ちになってしまいました。(中略)
烈しかったのは、あの舞鶴での少年時代だけのことであって、由加子と十数年振りに再会してからの私の心には、もはやどろどろとした肉欲

だけがうごめいていたとしか思えないふしもあるのです。ともあれ、あなたにもたらした悲嘆を、あなたに与えた苦痛を、あなたに対する裏切りを、心からお詫びいたします。書き疲れて、ぐったりした気分ですが、

(後略)

(第二通 63〜64頁)

亜紀に対する「礼儀」として、由加子との関係を書いてきた靖明は（本文七）で、「うんざりしてきました」「ぐったりした気分」と倦怠感さえ記す。亜紀にとって、靖明と由加子との関係は「明晰な意志というもののなかった」離別と深く関わるべきことがらだが、靖明は、成人後の由加子との間には「どろどろとした肉欲」しかなかったと言う。もちろん、靖明のこの言葉は、由加子との出会いから無理心中事件までを真摯に振り返って得た省察の結果であり、亜紀を偽るつもりもない。亜紀が知りたがる（由加子との関係）を「どうでもいい」とするのは靖明にとっての真実である。内省によって得られた判断に誠実であろうとする靖明は、「どろどろとした肉欲」という文言によって亜紀の訴えを受け流す。「心からお詫びいたします」とも書いているが、それも謝罪の姿勢を見せて、亜紀の求めをすりかえているに過ぎない。亜紀と靖明は、ここからすれ違っているのである。

靖明は亜紀の手紙に返信を出しているが、以上のように、そこに読まれるのは拒否である。その根本の理由は、靖明の関心事が（男と女の絡み）ではなく、「ある痛切な感慨」とつながった無理心中事件という（生と死の絡み）であるからだ。つまり、靖明の最大の関心事は瀕死体験に根ざした（生と死の絡み）を解すことで、亜紀が求めた（男と女の絡み）を解明することではないのである。だから亜紀の求めに対応することができない。それは口調や挿入句などに表れているだけでなく、その内容においても、亜紀が詳細に書き綴った離婚当時の激しい気持ちにも、また、蔵王での再会時の動揺にも全く触れようとはしなかったところにも表れていた。

第一通と第二通のやりとりから、すでにこんなことが見えてきた。靖明と

亜紀はそれぞれ違った関心・課題を持っている。亜紀は自分の課題の解決を靖明に要求しているが、靖明は返信を出したけれども、それを引き受けることはしなかったのである。すなわち、亜紀と靖明とがそれぞれの心底に抱えているものは食い違い、その齟齬が最初のやりとりから芽生えているのである。

第三節 亜紀の変化と齟齬との関係

亜紀は、屈折した気持ちに支配されているが、時には意地と我儘が突き出て反抗を図ろうとする。亜紀がこのような（両面性）を持っていることを第一節で示した。三通目の亜紀には、靖明の返信に潜んでいたものを敏感に感じ取って、ある変化が起こり始めたようである。

*本文八

あなたが、あんなロマンチックなお返事を下さるとは予想も出来ないこととで、この手紙を書いたのは有馬靖明などという人ではなく、まったく別の人間なのではないかと哀しくなったり、切なくなったりしてしまつたのでございます。（中略）

初めからお返事をいただこうと思ってお出した手紙ではありませんでしたが、いざお返事を頂戴してみると、逆に妙な消化不良みたいな気分になってしまいました。私、あなたと瀬尾由加子さんのいきさつを、最後まで知りたいと思います。（中略）いまでも、知りたいという気持ちでいっぱいです。私には知る権利がある。（中略）あるいは、最初から私はそのことが知りたくて手紙などを出してしまつたのかも知れませんが、（中略）私、どうしても、あなたのロマンチックなお話の顛末を教えてくださいらなければおさまりがつかない気分なのです。（第三通 66〜67頁）

亜紀が靖明からの返信を読んだ後の〈感想〉である。ロマンチックな返事を読んだのは自分の知っていた靖明ではないことが、なぜ、亜紀を「哀しくなったり、切なくなったり」させたのか。そして、意外な返信は、なぜ、彼女を「逆に妙な消化不良みたいな気分」にさせたのか。それらについては、二つのことが考えられる。

一つは亜紀が無意識のうちに、夫婦であったときの感覚で靖明に〈親近感〉と〈一体感〉を確かめようとしていることである。

(父は……引用者注) あなたも御存知の、あの青山のマンションで東京住まいをつづけています (第一通6頁)

(育子さんの事は) 別に書くまでもなく、あなたは御存知のはずでしたわね (第六通102頁)

(岡部さんの釣り好きは、あなたもよく御存知でございますわね) (第十通184頁)

あなたも一度、私と父との三人で、母のお墓に行ったことがありましたわね (第十四通250頁)

これらの文面から、亜紀は二人の〈元夫婦〉という関係にこだわり、その〈親近感〉と〈一体感〉の継続を靖明に強要していることが分かる。

もう一つは、亜紀が靖明に未練への対応を要求している一方、亜紀なりの離婚についての解釈(それは亜紀が、それ以後の自分の生の頼りにしてきたものでもあった)を靖明に認めてほしい気持ちもあることである。前節で述べたが、亜紀は意地のようなものを内に持っている。離婚当時も、それから十年間も、ある意味では、〈意地〉で乗り越えてきた。とりわけ強く思っているのは、「見知らぬひとりの女性に、負けたくなかった」ことである。

亜紀は「初めからお返事をいただくと思ってお出しした手紙ではありませんでしたが」と書いたが、実は靖明の返事まで予想して、やりとりが自分の納得する方向に運ばれていくことを期待していたし、また、その期待は十

分に叶えられるものと思っていた。しかし、靖明の返信によって、亜紀の予想はすっかり外れてしまう。亜紀が求めた〈親近感〉と〈一体感〉は、靖明の距離感のある、簡潔明瞭な口調に拒まれた。加えて、由加子と靖明との関係が中学時代以来であったという事実も亜紀の予想をはるかに超えたもので、「見知らぬひとりの女性に、負けたくなかった」という意地もよりどころを失う。一方、靖明の言に従えば「どろどろとした肉欲」しか、靖明と由加子との間にはなかったのであり、「どろどろとした肉欲」に負けたのも彼女の「強固な自尊心」の許せないことである。

つまり、亜紀の気分を損なうような話がたくさん書かれているのに、彼女の一番期待していたことがどこにも書かれていないのが靖明の返信である。亜紀はそこから自分が〈いい加減にされた〉ことに気づいた。だから、「哀しくなったり、切なくなったり」して、「逆に妙な消化不良みたいな気分」になつてしまった。

一通目では、彼女は「どうしてそんな気持(手紙を書きたいと思うこと……引用者注)に襲われたのか、私には自分の心がよくわかりません」と靖明への未練をほかしていたが、第三通に至れば、「あなたと瀬尾由加子さんのいきさつを、最後まで知りたい」、「どうしても知りたい」と、未練を隠そうとはしない。そして、今までの穏やかな態度とは違って、「知る権利がある」と大胆な言葉を使って強硬な態度を取る。手紙を出す理由についても、「初めからお返事をいただくと思ってお出しした手紙ではありませんでしたが」(第一通)から、「あるいは、最初から私はそのことが知りたくて手紙などを出してしまっただけかも知れません」(第三通)へと変わっていった。「あなたのロマンチックなお話の顛末を教えてください」と、皮肉な口吻すら洩らす。

それでは、こうした亜紀の変化を靖明はどう受け止めるのか。靖明が亜紀に与えた、まことに短い第四通の全文を引用する。

*本文九

前略

お手紙確かに頂戴いたしました。あなたのご立腹ももつともな話で、私も返事を差し上げてから、いささか自己嫌悪に陥っておりまして。年がいもなく甘つちよいことを書き綴ったものだ、数日恥かしさと馬鹿らしさで落ち着きなく過ごしてしまつた次第です。

ですが、私にはもうあなたにこれ以上手紙を書きつづける気持はありません。お便りをいただくのは、はっきり申し上げて迷惑です。私に、由加子との顛末を書かねばならぬ義務はないと思われます。そんな厄介なことはご免こうむりたいという気持です。私たちの手紙のやりとりは、これを最後にしたいと思ひます。

四月二日

草々

有馬靖明

勝沼亜紀様

(第四通68頁)

第三通の亜紀の勢いに攻められて、靖明も烈しい反応を示す。

一回目(第一通・第二通)の往復です。靖明は「いささか自己嫌悪」に陥り、「数日恥かしさと馬鹿らしさで落ち着きな」かつたと書き記していたが、亜紀からの第三通は「これ以上手紙を書きつづける気持はありません」と、彼の心を閉ざさせてしまった。さすが受け流すことが「得意」な彼も、「迷惑です」「義務はない」「厄介なこと」などの敵しい言い方で亜紀の要求を拒絶する。この手紙を書いている靖明の生活状況に、離婚したかつての妻に心を向けるほどの余裕がなかったのも事実であるが、そのような靖明の経済的切迫以前の、靖明の抱えているものと亜紀が抱えているものとの間に交差するところがなかったと見るべきだろう。

このように、二回目(第三通・第四通)のやりとりを終わらせた二人の間

に齟齬は見えても、そこに(交感)という要素は見えない。靖明に対する未練が動機で手紙を書く亜紀と、瀕死体験に根元的なものを見てしまつた靖明との間で、(交感)は生じ得ない。亜紀の変化は結局靖明のさらなる抵抗を引き起こし、その抵抗が二人のさらなる齟齬を生じさせた。一回目(第一通・第二通)の往復に芽生えていた齟齬が明瞭な対立となつて現れたのが、二回目(第三通・第四通)の往復であつたといえるだろう。

(生と死)の問題を重視する先行研究は五通目以降の手紙に多くの視線を注いで、初めの四通を検討の対象にしなかつた。私には、この四通に現れてきた二人の齟齬は、以後の往復書簡にも通底しているように思われるのである。一回目と二回目にすれ違ひがあつたとしても、やがて、両者の思念が相互に作用してゆくというかも知れない。(生と死)をめぐる問題が「モーツァルト」の楽曲と、喫茶店「モーツァルト」の火事を契機に作品に導入されるのだが、果たして、この「モーツァルト」を介して、亜紀と靖明とは互いに理解し合つたのだろうか。

第四節 「モーツァルト」の意味

亜紀は離婚後、「モーツァルト」という名の喫茶店によく行くようになった。彼女はモーツァルトの音楽だけを流すこの喫茶店で口にした(生と死)の感想は、靖明の(生と死)の感想を引き出す。先行研究で最も視線を浴びているところである。多くの論者がここを根拠にして、亜紀と靖明は(生と死)をめぐる思考を深め、二人が「交感」し、成長を手に入れると主張する。

次に引く(本文①)は、亜紀が店の主人にモーツァルトの音楽の感想を述べたところである。

*本文①

モーツァルトの音楽に魅せられて、何千回、あるいは何万回と曲に耳を傾けてこられた御主人に、私ごとき者がかりそめな感想など述べられる。

はずがありませんでした。ですが、御主人のあまりに真剣な目の光に促されて、私は思わず言ってしまったのでございます。「生きていることと、死んでいることとは、もしかしたら同じことかもしれへん。そんな大きな不思議なものをモーツアルトの優しい音楽が表現しているような気がしました。」
(第五通81頁)

実線部だけを見れば、確かに(生と死)に関する思考がテーマのように見えてくる。しかし、先行研究では実線部を支える文脈のほとんどが考慮されてこなかったのではないだろうか。(本文①)における亜紀の感想は「御主人のあまりに真剣な目の光に促されて、私は思わず言ってしまった」ものであつたはずである。しかし、後で引用する(本文④)の破線部「いったい何を意味していたのか自分でもわからぬ」といふ文脈が無視され、この実線部分の感想だけが大きくとりあげられてきたのである。

この感想を支える文脈はどのようなものであつたのか。それを、(本文②)から(本文⑦)までのように整理してみよう。

*本文②

「ジュピター」が終わると、何やら吸い込まれていきそうな静けさが私を包んだのです。何という奇妙な静寂だつたことでしょう。私はその静寂の中で、また、あなたに逢いたい、と強く感じました。(第五通73頁)

(本文②)は亜紀が初めて店に入って、「ジュピター」を聞いた時の感想である。ここで亜紀は、聞き終えた後に感じた「奇妙な静寂」について述べた後、「また、あなたに逢いたいと強く感じました」という靖明に対する感情を付け加えている。

*本文③

すると、それまで何でもなかつた一曲のシンフォニーが、たとえば

ないくらい美しい妙なる調べ、そして同時にどうしようもなくはかない世界を暗示する不可思議な調べみたいに感じられてきたのでございます。

(中略)

もう死んでしまった、顔も見たくもない、きつと私よりはるかに美しい人であつたに違いない瀬尾由加子さんの容姿やら表情やらを勝手に想像してみながら、モーツアルトのシンフォニーの、さざなみのような調べに身をまかせていたのでございます。
(第五通75頁)

これは亜紀がシンフォニーに聞き入っているある青年の姿から「死」といふ言葉を思いついて、それを頭に置きながらシンフォニーに聞いた時の感想である。音楽からいろいろ思いながら、死んだ由加子のことを想像する。

*本文④

私は、夏の日の長く伸びる夕暮の陽差しの中を急ぎ足で帰って行きましたが、自分の言つた言葉が、いったい何を意味していたのか自分でもわからぬまま、再び瀬尾由加子さんのことを胸裏に浮かべたのでございます。どんな女性であつたのであろうか。なぜ自らの命を、あなたとの交わりのあとで絶つたのであろうか。
(第五通82頁)

(本文④)は亜紀が店の主人にモーツアルトを聞いた感想(本文①)の実線部分)を述べた後、家に帰る途中に思つたことである。先に言つた「自分でもわからぬ」感想のかわりに、再び由加子のことを思い出す。

*本文⑤

そうしているうちに、さつき御主人の言つた宇宙の不思議なからくり、生命の不思議なからくりという言葉の秘めている何物かを、私はほんの一瞬间理解出来るような気がしてきたのです。けれども、それはほんの一

瞬のことでした。私の心の中にはまた突然、瀬尾由加子さんの幻影が映りました。私よりはるかに美しい容貌と肉体を持つ物言わぬ女性が、私の中に立っていました。(第六通95頁)

火事に遭った店の主人が亜紀のモーツアルトの感想に、自分の理解を付け加えた箇所である。それは「ほんの瞬理解出来るような気がしてきた」が、「ほんの瞬のことでした」と言い、次の瞬間、亜紀はまた由加子を思い出すのが(本文⑤)である。

*本文⑥

読み終えたとき、頭がぼおつとして、しばらくじつと気のしずまって行くのを待っておりまして。それからもう一度、死んでいたあなたが、感じたり、見ていらつしやつたものの書かれています部分を読み返しました。何度も何度も読みました。それはもはや私の理解出来る範疇を超えておりました。(第八通148頁)

靖明は亜紀のモーツアルトの感想にある(生と死)の話に惹かれて、自分の瀕死体験と、それから掴み取った(生と死)をめぐる切実な思念を返信に書いた。それを読んだ後の亜紀の感想が(本文⑥)である。自分の感想と関わった話を読んでいるのに、「私の理解出来る範疇を超えておりました」としか亜紀には感じられないのである。

*本文⑦

「生きていることと、死んでいることとは、もしかしたら、同じことかもしれない」。まるでどこかから降って湧いたみたいな言葉でございまして。ですが、あの言葉を手紙の中にばつんと書き入れた事が、あなたに、私の知らなかった多くの事柄を教えていただく引き金となったのでござ

います。

(第十四通260〜261頁)

(本文⑦)は亜紀が前便で自分が書いたモーツアルトの感想への評価である。「私の知らなかった多くの事柄を教えていただく引き金」としての役割が大きかったが、亜紀は、話自体から深い意味を見出すことはなかったと書いている。

(本文②・③・④・⑤)の共通点は、(生と死)の話題が終わった後、すぐ靖明か由加子することに亜紀の思いが走ることである。(本文①・⑥・⑦)の共通点は、亜紀自身が(生と死)の話を軽い意味で受けとることである。

これらの文脈から、亜紀は実は「生きていることと、死んでいることとは、もしかしたら同じことかもしれへん」という感想について真剣に考えたことがなかったことが見えてくる。(男と女の絡み)は終始彼女の頭から離れたことがない。亜紀の言葉を通して浮かび上がってくるのは、モーツアルトの音楽から得られた(生と死)をめぐる深い思念ではない。靖明への未練、そして、その未練を断ち切らざるを得ない状況に置かれた自己憐憫と哀傷に由来する一箇の情緒にすぎない。靖明がその瀕死体験から得た(生と死)の感慨とは本質的な意味において異なる。

つまり、(生と死)という問題系をめぐるでも、亜紀と靖明とでは、その思念の質やそこに見たものは、ずいぶんと異なっているのである。

『錦繡』を形作る全十四通の内、ようやく、半数ほどの書簡を取り上げたのだが、そこから、亜紀・靖明の(交感)ではなく、(齟齬)が浮かび上がってくる。だとすれば、先行研究の論者たちによって亜紀と靖明が共有したとする(生と死)をめぐる問題系も、読者が靖明の思念を亜紀に重ねる形で構築していった幻影にすぎないのではないだろうか。少なくとも、作品世界内の亜紀は、そういう読者たちに置き去りにされたままである。

冒頭に引いた黒井千次の「いわゆるハッピーエンドの小説ではない」という評言は、実は、亜紀の抱えていた問題系そのものが何の解決も持つに至らなかったことを示唆しているように思われるのだ。

- 注1、黒井千次「解説」『錦繡』新潮文庫、一九八五年五月。
- 注2、野松循子「宮本輝『錦繡』をめぐって——生の交響曲——」『燻祭』第三号、一九九三年三月。
- 注3、『新研究資料現代日本文学』第二卷（明治書院、二〇〇〇年一月）の「宮本輝」の項（山本康治担当）。
- 注4、注1に同じ。
- 注5、酒井英行「『錦繡』の折り」『静大国文』第四八号、一九九六年四月。引用は『宮本輝論』（翰林書房、一九九八年九月）に拠る。
- 注6、注5に同じ。